

井沢元彦

長編サスペンス推理

六歌仙暗殺考

KODANSHA NOVELS

講談社
ノベルス

あきこ



六歌仙暗殺考

昭和五七年七月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価五八〇円

著者—井沢元彦

©1982 MOTOHIKO IZAWA Printed in Japan

発行者—三木章



発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二二 郵便番号一一二 電話東京(〇三)—九四五—一一一(大代表)
振替東京八—三九三〇

印刷所—大日本印刷株式会社 製本所—株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

六歌仙暗殺考

沢元彦

ODANSHA NOVELS

講談社
ノベルス

ブックデザイン 市川英夫
カバーイラストレーション 矢吹申彦
本文イラストレーション 畑農照雄

そのパブは渋谷から少し道玄坂を登った住宅街に入る手前の角にあった。すぐ近くにデパート・商店街があり、いわば住宅街と繁華街の境い目である。

八月十一日、火曜日。その日は朝から冷たい雨が降っていた。夏なのにあまり暑くなく、むしろ寒いほどだ。

そのパブ——「エレファント」のバーテン西条は客が少ないのにほっとしていた。明日は定休日だ。経営者から全面的に経営を任せられ、実質的なマネージャー格でもあ

る西条は、この店では三年目になる。

時計の針は午後十一時をさしていた。客は三人しかない。四人いるホステスの女の子も暇をもてあましている。

「あの爺さん、来なくなっちゃったな」

と西条は呟いた。

午後十一時、この時間になるとほぼ毎日のように和服姿で現われ、この店では一番高いバラントインの十二年物のボトルを出し、ちびりちびりと一人でやる老人がいたのである。ただし三カ月前だった。五月の連休が終わった頃からばったり来なくなった。時々この時刻になると思い出す。ひよっとしたら、もう死んでしまったのかもしれない。だが、それは西条にとって、どうでもよいことである。

西条は自分の背中の方にある棚のウイスキー瓶を点検した。向って左側はキープボトル、それぞれの客の名札

にかけてある。右側がボトルを入れない客に出すウィスキーの置場所である。あの爺さんの好きなバラントイン12とジョニ黒がなくなりかけていた。

「まあいい、今夜はもつだろう」

と西条は思った。無くなったら、すぐに在庫と入れ替えればいいのだ。話は簡単である。

西条はカウンターの隅にある電話を取って恋人の文江の店へ電話した。文江は近くのスナックに勤めている。

「二時頃終わる。とりあえず、こちらへ来いよ」

と西条は文江に言った。

「いいわよ、旅行の相談もしたいの」

文江は甘えるような声で言った。

ハネムーンのことだ。西条もついに年貢^{ねんぐ}の納め時が来たと観念している。もっとも、それは楽しい納め時だった。

西条は浮き浮きとした気分になってきた。

こうなれば客は少ない方がいい。後片付けも簡単になる。早めに店をしめ、いったん入口を閉じたあと、文江を迎え入れる。それから後は、片付けを手伝ってもらい、二人でゆっくりとグラスを傾ければいい。

西条はいまのうちに帳簿の整理をしておこうと、カウンターの隅で帳簿を広げた。

2

二日後の八月十三日、警視庁捜査一課に所属する香川警部は、夏カゼをひいて調子が悪かった。こういう時は何事もタイミングが悪く起こってくるものだ。きょうは電車も少し遅れ気味であった。

刑事^{ざか}部屋に入っていくと、香川は茶を飲む暇^{ひま}もなく上司から出勤を命じられた。部下の刑事は既に出発していた。

「やれやれ、朝っぱらから何だ？」

「渋谷のバブで若い男女の変死体が見付かったんです」

と一人残っていた元木刑事が答えた。

「変死体？」

「ええ、心中らしいんですが、不審な点もあるということとで——」

香川はそれ以上聞かずに、元木と一緒にパトカーに乗り込んだ。すべては現場を見てからだ。先入観を持って事件に取り組むと、ろくなことがない——それが長年の経験で得た香川の結論だった。

現場は渋谷道玄坂近くのバブ「エレファント」という店だった。パトカーで乗りつけた香川は野次馬をかき分け、立入禁止の表示のあるロープをまたいだ。

「係長、こっちです」

と先着していた松原警部補が店の中から香川を呼んだ。松原は香川より十歳も若い、仕事に対する熱心さ

には定評があった。

死体は二つあった。

カウンターの前にバーテン風の若い男が一人、とまり木から転げ落ちた形で赤いワンピースの若い女が一人、いずれも苦悶の表情を浮かべ胸や喉を掻きむしったあとがある。

カウンターの上には、ウイスキーのボトル、ミネラルウォーター、アイスペールが置かれ、その他に飲みかけのタンブラーが一個、もう一個はカウンターの外側で碎けていた。

「毒物か？」

香川は松原に訊いた。

「そのようです。ものは何かわかりませんが」

「発見の状況は？」

「様子を見にきた店の経営者が見つけたんです」

「様子？ 何かおかしかったのか？」

香川は聞き咎めた。

「この店はきのう休みだったんですが、死んだバーテンから経営者に電話がある筈だったんですよ。ところが電話がない。重要な電話なのにアパートに本人もいない。

そこでもしやと思ってやってきたわけです」

「なるほど、で、鍵はかかっていたのか？」

松原は頷いた。

「ええ、外から開けたそうです」

香川は床の死体に視線をあてた。

「まだ若いのに、可愛想に」

苦痛に歪んだ顔が痛々しい。

「で、死体の身元は——」

香川の問いに松原は内ポケットから手帳を取り出し読み上げた。

「男の方が西条道男、二十八歳、このバーテンです。

女の方は持っていた運転免許証から、梅田文江、二十四

歳。職業や西条との関係は不明です。——それから死亡推定時刻ですが、死後三十時間ぐらいだそうです」

「とすると、きのうの未明ぐらいか」

「そうですね。経営者に話を聞きますか？」

「うむ、どこにいる？」

松原が店の奥へ香川を先導した。事務室のような殺風景な部屋の事務机の前に、中年のでっぱりと太った男が座っていた。男は小西祥次郎と名乗った。

「小西さん、ちょっと重複するかもしれないのですが、発見の状況等をお聞かせ願いたいです。私は捜査一課の香川と申します」

香川はそう言つて小西の前に座った。

「どういう風に死体を発見なさったんですか？」

小西は蒼ざめた表情で、

「先程、店の様子を見にきたんです。鍵をあけたら、二つも死体があったんで、あわてて一一〇番したわけで

す」

と口ごもりながら答えた。

「それは何時頃？」

「一時間ほど前ですか——」

小西の答えに香川はあらためて時計を見た。

スポーツ向きなので買った百メートル防水時計が、九時半を示していた。したがって発見は午前八時半頃ということになる。

「その時間に店に来るのはいつものことですか？」

「いえ、朝はいつもこんな時間には来ません。ただ、ちよつと気になったもんで」

と小西は目をしょぼしょぼさせた。

「何がですか？」

香川は尋ねた。

「西条ですよ。彼がきのう仕入れのことで電話してくる筈だったんですが、してこないんで、もしや店で酔いつ

ぶれているんじゃないかと」

「待って下さい。つまり店はきのうは休みだった？」

「ええ」

「電話は何時頃までに来る予定だったんです？」

「きのうの夜です。待っていたんですが、かかってくなくて、寝てしまったわけですよ」

「どうして、被害者がここで酔いつぶれていると思ったんです？ 前にそんなことがあったんですか？」

「——時々、休みの前は、店がはねたあと飲んでたようです。こちらも特に干渉はしなかったんです。よくやってくれてましたし」

「西条さんと一緒に死んでいた女性に心当りは？」

小西は大きくかぶりを振った。

「ガールフレンドですか？」

香川は重ねて質問した。

「いえ、知りません。見たことないです」

小西は答えた。

「亡くなった西条さんは、いつ頃からこの店に？」

「三年ぐらい前からです。そう、春ごろだったかな。若いのに経験を積んで、遅番は全部やつに任してたんです」

「遅番といいますと？」

「夜の八時から閉店までですが……」

「閉店は何時です？」

「十二時です、一応は」

と小西はばつの悪そうな顔をした。

「と言うと、実際はもっと遅くなってたわけですか」

「ええ、なじみ客も沢山いますし」

「実際には何時です？」

「二時か三時ですね」

「それからあとかたづけをする？」

「一時間ぐらいかかりますかね」

「となると、三時か四時——」

香川は推測した。その間、西条はガールフレンドを待たせていたのだろうか。そしてウィスキーを飲み、二人は死んだ。それは心中だったのか、それとも、どちらかが仕掛けた無理心中なのか、あるいは二人を狙った殺しなのか、だとしたら動機は何だろうか？

「ところで、あなたが店に入った時、入口には鍵がかかっていましたか？」

香川は質問を変えた。

「かかってました。私がドアの鍵を開けたんです」

「鍵は他に誰が持つてゐるんです？」

「私が二つ、西条が一つです」

小西が答えると、松原が横から、

「係長、カウンターの下に一つありました」

と言^せい添えた。

「他に外からの出入口は？」

香川が訊いた。

「裏口がありますけど——」

香川は物問いたげに松原を見た。

「鍵がかかってましたよ」

と松原は言った。

香川は礼を言つて店の方へ戻つた。

「どう思う？」

香川は鑑識課員が忙しく飛び回る中で松原に訊いた。

「わかりませんね。殺しにしても妙だし、心中にしてはしっくりこないし」

松原は首をひねつて答えた。

香川も同感だった。

心中にしては、遺書もなく、あまりに普段着のままだという感じがする。

香川はカウンターの上に置かれたボトルに視線を走らせた。バラントインの十二年物だ。中身は半分ほどに減

つてゐる。

「松原君、小西さんと呼んでくれ」

香川が命じた。松原はすぐに小西を連れてきた。

「小西さん、あのボトルは亡くなった西条さんの？」

とカウンターの上に置かれたボトルを指さした。

小西は二人の死体が既に運ばれたのを知つてほつとしたように、

「いえ、西条のボトルなんてありませんよ」

と答えた。

「ということば、これは客に出すボトル？」

「そうでしょう」

と小西は言った。

「それを無断で飲んだことになりますね？」

「——ええ、でも、それぐらいは大目に見てたつもりです」

「いや、私の言いたいのはそういうことじゃないんで

す」

と香川は小西の方を振り返り、

「この中に毒を入れたのが誰かということですが、問題は。無理にしる合意にしる、心中ならば二人のうちのどちらかだが——もし、殺しだとなると、客に出すボトルにあらかじめ毒が入っていた可能性もありますね」

それを聞いて小西はしばらく考えこんでいたが、

「いや、そんな筈はないと思います。だったら二人が飲む前に誰か客が死んでますよ」

「でも、このボトルの酒がその日は出なかったとしたら」

松原警部補が言った。

「いや、フリの客に、ただ水割りと言われたら、これを出すんです。——だから最初から毒が入ってたわけがないですよ」

香川は考えてみた。フリの客に出すボトルなら、仮に

誰かが毒を入れておいたとしても、最終的に誰が死ぬかはわからない。しかも、実際はバーテンの西条が飲むまで、誰も飲まなかったことになる。もし、二人以外の誰かがボトルに毒を入れたとしたら——だ。それよりは——、

「心中と考えた方が自然かな」

香川は口に出して呟いてみた。

3

第一回の捜査会議はその日の夜、所轄署しよかつの会議室で開かれた。出席者は警視庁から香川ら捜査一課十三係の十一人、所轄署からは刑事課長ら多数である。

まず鑑識の結果が報告された。

要点を述べると、次のようになる。

まず死因は農薬による中毒死であり、ボトル内から検

出された。死亡推定時刻は八月十二日水曜日午前三時から四時の間。ボトルからは西条の指紋の他に二種類の指紋が発見されたが、それは死んだ梅田文江のものではなかった。なお店内には外部から侵入した形跡は発見されなかった。

続いて、被害者同士の関係について聞き込みにあたっていた岡田刑事が報告した。

「二人は恋仲だったようです。秋には結婚する予定で、式場も予約してました。その紹介でハワイにハネムーンへ行くつもりだったようで、予約金を払い込んでいます。金額は十万円です」

「心中なら、十万も払い込むかな。給料はどのくらいだったんだ？」

刑事の一人が訊いた。

「梅田文江はスナックに勤めてました。手取りで十二万ぐらいでしょうか。西条はそれよりは上でしょうが」

と岡田は答えた。

「やっぱり十万は右から左に出る金じゃないのでは」

所轄の泉刑事課長が言った。

「どうですかね。自殺する人間がわざわざ回収にいくとも思えません」

香川は疑問を提出した。

「すると、香川係長は心中説ですか？」

泉が訊いた。

「いや、なんともいえません」

香川は言った。心中だとすると、遺書がないのと普段着のままという点が引くかか。二人は死に対して心を配った様子が全然ないのだ。しかし、時間の関係や小西の証言から見て、ボトルに毒を入れた人間が死んだ二人の他にいるとは思えないのだ。もし、別の人間が毒物を混入したとしたら（西条以外にカウンター内に保管してあるボトルにそれが出来るとは思えないが）もっと早い

時点で客に被害が出てもいい筈だ。

結局、被害者への怨恨^{えんぐん}関係、農薬の入手ルートに重点を置いて捜査を続けることになった。

「愉快犯の可能性はないでしょうね？」

最後に松原が遠慮がちに言った。

愉快犯というのは、何の関係もない家に放火したり、毒入りコーラを放置したりして、それを愉快^いがる犯人のことを言う。香川はこの命名がいかにも不正確な気がして嫌いだっただ。

「——それは多分ないだろうな」

と泉が言った。その根拠は客に被害が出なかったというところである。不特定多数を狙ったという線は確かになさそうだった。

4

成田空港午後九時。

南条圭は数週間ぶりに帰ってきた故国の風景を、濃霧で遅れて着陸したパンアメリカン航空機の窓から眺^{なが}めた。

「やつと着きましたね」

斜め後ろに座っていた極東日報特報部の津田記者が声をかけた。

「君のおかげで退屈しないで済んだ。どうもありがとう」

と南条は読んでいたペーパーバックを津田に返した。

「やっぱりエコノミーに乗った方が楽しいですね。思いがけない人に会えるし」

と津田は本を受け取りながら笑った。

「それはファーストクラスに乗る余裕がない僕に対する皮肉かい？」

南条は軽口を叩くとショルダーバッグを持って立ち上

った。津田は後に続いた。津田は日米貿易摩擦をテーマにした連載記事を書くため、アメリカ工業地帯の取材を終えて、サンフランシスコから帰国の途についた。そして乗ったジャンボ機の中で思いがけない人物と再会した。

それが南条だった。

南条圭——日本ではその名を知る者は少ないが、アメリカでは超一流の東洋美術の鑑定家として著名だった。

しかし、津田は南条を単なるディレッタントとしてではなく、むしろ“探偵”^{ディテックタイプ}として評価していた。数年前、津田はパリ駐在員だった。そのパリ時代、市内のアパートマンに住んで大学に通っていた南条は、日本警視庁からICPO（国際刑事警察機構）に派遣されていた香川警部補と共に、パリ警察がサジを投げた難事件を次々と解決した。

もともと、それらの事件は香川警部補と面識のあった

津田が、酒のサカナとして持ち込んだものだった。その場に友人として居合わせた南条は、津田が事件の概略を話すだけで、真相をずばりと言い当てた。

その推理は香川を通して当局へ伝えられたが、まちがっていたことは一度もなかった。

筋の通った高い鼻梁^{びりょう}、透き通るような茶色の瞳、そして軽くウェーブのかかったプラチナブロンドの混った豊かな髪——そのせいか彼は初対面の人間には必ずと言っていいほどに、外国人との混血に見られてしまう。実際は純粋の日本人なのだが。

「何をじろじろ見てるんだい？」

南条が不思議そうに訊いた。

「いえ、あなたがどうしても日本人に見えなくてね」

津田の言い草に南条は苦笑した。

「人が気にしていることを言うなよ。それでも純粋な日本人だよ。——もっとも、純粋の日本人とは何かという問